時にかなって美しく

松隈玲子

澄み渡った空、明るい太陽、美しい樹々の若芽、どの一つにも人智ではかり知ることのできない神の恵み、いのちの躍動が感じられる五月です。

旧約聖書に「神のなされることは、皆その時にかなって美しい、神はまた人の心に永遠を思う思いを授けられた。それでもなお、人は神のなされるわざを初めから終りまで見きわめることはできない」ということばがありますが、春の美しい自然のいぶきの中で、思い思いの遊びを展開している子どもたちの姿を見ると、一しおこの思いが実感となってせまります。

二歳児には二歳児の五歳児には五歳児のその時々の美しさを充分に発揮させることができているだろうか、日々折々、一人ひとりの子どもたちの美しさをしっかりととらえ、大切に育くむ努力をしているだろうかと自問自答するとき、目立つ子どもに注意をうばわれたり、集団づくりに熱心になりすぎて、目立たない子どもを「見おとした子ども」にしてしまったり、あるいは、「やらせればできた」という経験から、次々に、年齢以上の活動を設定して子どもたちを引っぱっていくことに躍起になっていることの多い自分に思いあたります。

幼ない心に、不安と希望を抱いて、はじめての集団生活を迎えた子どもたちも、保育者や友だち、遊具や飼育動物など、人や物との出会いとかかわりを通してだんだんと園生活になれてきたこの頃です。

しかし、全体的にみれば、園生活のリズムを受けとめ、幼稚園での生活が楽しくなってきたように見える子どもたちの

中にも、気をつけてみると、この時期に多くみられるさまざまなとまどいやおもいを持っている子どもたちのいることに気付きます。

「お兄さん組になったのだからしっかりするのよ」と家庭でも園でもはげまされ、気持の上ではその気になっているものの、具体的にどうして良いかわからずおろおろしている子ども、遊んであげようと思って年少児にさそいかけ「いや」と言われてベソをかいている子ども、入園まで、家庭で絵本をよんだり積木遊びをしたり、母親とあるいは一人で静かに遊ぶことが多かったために、子どもたちの元気な声も、活気あふれる園の雰囲気も、騒音に感じられて、本来ならば、いきいきとふくらむはずの内部のイメージさえもしぼんでしまって畏縮している子ども、一人遊びを充分楽しむ間なく集団への参加や人とのかかわりを急がされるあまりに、幼稚園はつまらない所だと思っている子どもなどさまざまです。

このような子どもたちの状態も、保育者やおとなの立場から見れば、こうして相手にも意志のあること、自分の思い通りにはならないことなどを体験しながら社会性を育てていく大切なプロセスであると考えられますが、当人にしてみれば、少なくともその時には、この上もなく悲しい思いの中にいるわけです。

ですから、このような子どもたちに対して「入園前の外遊び・子ども同士の遊びをさせないから」「親の過保護」「子どもの社会性の未熟」などとその原因を親や家庭にのみ求め「親が変れば子どもが変る」という信念のみを強く押しださないようにしたいものです。

親の変革を求める前に、まず保育者自身の変革をこころみてみましょう。それは、青虫が蝶になるように、驚くような変化でなくても良いのです。ほんの少し、見方を変え、今までよりもう一歩子どもに近づいて、両親と共に重荷を負い合う保育者としての思いで、一人ひとりの子どもを園でも家庭でも大切な宝として見守るものになりたいと思います。子ども一人ひとりには、神さまからいただいた賜がたくさんあります。その賜を、その時にかなって美しくゆたかに育てることが、神から、永遠を思う思いを授けられた人間としての保育者のつとめであるように思います。

（西南女学院短期大学）